

歌語「しながとり」考

— 『新後拾遺集』四八三番藤原俊成の歌をめぐって —

鹿 野 し の ぶ

目次

- 一 はじめに
- 二 「しながとり」の詠まれ方
- 三 歌学書における「しながとり」解釈の変遷
- 四 俊成における「しながとり」の解釈
- 五 中世万葉学における「しながとり」
- 六 『新後拾遺集』冬歌における配列構成
- 七 おわりに

一 はじめに

『万葉集』に見られる歌語について、歌学書などでさまざまに論じられているが、その解釈は多岐にわたる。ここで取り上げる「しながとり」もその一つであろう。「しながとり」については夙に森川敏行氏「しながとり考」がある。森川氏に拠れば、万葉語「しながとり」の「シナ」は「蒙古語」で「山」を表しており、

つまり「しながとり」は「山の鳥」のことであると結論づけている。^①『歌ことば歌枕大辞典』^②にも次のように記される。

「しながとり」は「しながどり」ともいい、「息長鳥」と表記される。「し」は息の意で、息の長く続く鳥、すなわち水鳥を指すとされ、水鳥の一種であるカイツブリをさすという説もある。(以下後掲)

「鳥」^③の一種とされる「しながとり」であるが、時代を経るにしたがい『万葉集』への関心と相俟って、特に院政期の歌学書に取り上げられ、さまざまに解釈が施される。後掲するが『歌ことば歌枕大辞典』にも「平安時代には「しなかとりあなの」という歌句にまつわる昔話が語られていたらしく」として、『俊頼髓脳』の説話を紹介している。

小稿では「しながとり」という歌語の詠まれ方と歌学書における解釈の変遷をたどる。なかでも俊成の「しながとり」詠を取り上げ、その解釈を考える。その上で、南北朝期に編纂された『新

後拾遺集』冬歌に俊成歌が採歌された背景について、南北朝期の万葉集の注釈などの関連から考えたい。

二 「しながとり」の詠まれ方

1 万葉歌

「しながとり」が詠み込まれた和歌で最も有名なものは次に挙げる万葉歌であろう。広瀬本万葉集には次のように記される。

A 志長鳥 居名野乎来者 有間山 夕霧立 宿者无而

シナカトリ キナノヲユケハ アリヤマ ユフキリタチヌ

ヒトハナクシテ

一本云猪名乃浦廻榜来者

〈第五句「或ヤトハ」「トモナシニ」と左傍にあり。また「ヒ」の右傍に「ヤ」とあり〉⁴⁾

(巻七・二一四〇・撰津作・作者未詳)⁵⁾

A歌は、『新古今集』(羈旅歌・九一〇)に
しながとりぬなのをゆけばありまやま夕霧立ちぬやどはなく
して

として入集する。また、西下経一氏『古今集校本』⁶⁾に拠れば、『古今集』の伝本のうち、筋切・元永本・唐紙卷子本の三本には、巻九・羈旅歌・四〇八と四〇九番歌の間に

しながとり猪名野を行けば有間山夕霧たちぬ明けぬこの夜はとある。該歌を本歌あるいは参考歌として詠んだと思われる例は多く見られ、後世へ大きく影響を与えた歌である。これは「猪名」

に掛かる用例となるが、久保田淳氏に拠れば鳩鳥は居並ぶ性質があるので「猪名」に掛かるとされる。⁸⁾

また、この他、『万葉集』には「しながとり」が三例、見える。ここもまず、広瀬本万葉集に拠り示し、校本での表記を確認してみよう。

B 大海尔荒莫吹四長鳥居石乃湖尔丹泊左右手

オホウミニアラクナフキソシナカトリキナノ、ウミニフネト

ムルマテ

(巻七・二一八九)

C 四長鳥居山響尔行水乃名耳所縁之内妻波母

シナカトリキナヤマトヨミユクミツノナニノミヨセシカクレ

ツマハモ

(巻一・二七〇八)

この二例は、「四長鳥」という万葉仮名で表記されるが、校本においてB・C歌の「四長鳥」という訓みに異同はなく、A歌と同様、「猪名」に掛かる表現となっている。

次に挙げるD歌の「しながとり」だけが「安房」に掛かる例である。その理由を先掲の森川氏は次のように述べている。

「安房」は古来、海産物の名所として知られている所だが、この「安房」のふさが古満州語の「ぶさ」(沢山)と密接な関係がある。

そこから「山鳥が沢山連れ立って鳴く野」「山鳥が数多く群れて鳴く」という意味になるという。

ここで、やはり広瀬本万葉集からその表記を引用してみよう。

D 水鳥安房尔継有梓弓(以下略)

ミナカトリアハニツキタルアツサユミ（以下略）

（巻九・二七三八・詠上総末珠名娘子一首并短歌）

校本に拠れば、神田本も初句を「水鳥」として、「ミナカトリ」という訓みである。また、広瀬本では本文の「水鳥」の「水」と「鳥」の間の右傍に「長」と記し、続けて「ウキトリノ」という注記がある。このことからD歌では、「水鳥」あるいは「水長鳥」として「ミナカトリ」あるいは「ウキトリノ」という訓読もなされてきたことが理解される。「しながとり」が「安房」にかかる唯一の用例とされた万葉歌は、あるいはカタカナの「ミ」を「シ」と誤読したことによる表現ということが考えられる⁹⁾。先掲の『歌ことば歌枕大辞典』においても「しながとり」が「猪名・安房」に掛かる枕詞として詠まれていることが指摘されるが「安房」に掛かる用例は少なく、その多くは「猪名」に掛かるとする。後掲する『袖中抄』のように該歌の初句を「みながとり」と訓読している歌学書も見える。

一方、小稿で特に問題とする南北朝期の『万葉集』の注釈書『詞林采葉抄』では、「しながとり」が「あわ」に掛かる理由を神話の内容から考察しており、その〈訓み〉については『万葉集』巻十の「水良玉」を指摘し肯定しようとしている。由阿が指摘する「水良玉」とは万葉集二〇一二番歌で、校本万葉集（広瀬本では該歌を欠く）に拠れば、「シラタマノ」とあるが、元暦校本、類聚古集には訓みは附していない。

この万葉歌の他に「しながとり」と「安房」を詠み込んだ用例

は、賀茂真淵の『賀茂翁家集』（四一九）に

しながとりあはにつぎたるす糸の山す糸もさやけしけふの日
かげは

という一首が検索されるのみである。つまり、万葉語において、「安房」にかかる用例はなく、広く「水鳥」（あるいは「水長鳥」）を「しながとり」と訓読してきた用法に従って真淵が「安房」に掛かる和歌を詠んだということになる。

2 勅撰集

勅撰集での「しながとり」の初出例は『拾遺集』（神楽歌・五八六）の

息長鳥猪名のふし原飛びわたるしぎが羽音おもしろきかな

であり、これは鍋島本『神楽歌』「井奈野（猪名野）」に

本

しながとる や 猪名の柴原 あいそ 飛びて 来る 鳴が

羽音は 音おもしろき 鳴が羽音

末

しながとる や 猪名の柴原 あいそ 網さすや 我が夫の
君は いくらか獲りけむ いくらか獲りけむ

裏書

おもしろき 鳴が羽の音や おもしろき 鳴が羽の音や あ
や 猪名の柴原や あいそ 網さすや 我が夫の君はいくら
獲りけむや いくら獲りけむや

と見える、本が和歌表現として整えられて採歌されたことに拠る。

次に挙げる『後拾遺集』（冬・四〇八・藤原国房）の歌

いかばかりふる雪なれば息長鳥猪名の柴山道まどふらむ

が冬の歌として「しながとり」を取り上げた初例である。該歌は、例えば、「右大臣家歌合（安元元年）」に

九番 左 俊恵法師

しなが鳥みなのしば山吹く風におろす紅葉ぞこやのやへぶき

右勝 道因法師

もみぢゆゑふたたびつらき風かな又庭をさへ払ふべしやは

左歌おぼつかなき事おほかり、ひとつは、しなが鳥みなのしば山、はふるき歌の二句なり、いと名歌ならぬはよめる事もあれどこれは名歌に侍り、就中に歌合にはいかが侍るべからん、すゑにこやのやへぶきとあるもなほ花などによせては八重ぶきともいひてむもみぢはたよりなくきこゆ、又こやの池のやへぶきとぞあるべき、かたがた心えられ侍らず右歌はこころこ葉あしくもあらねば勝にこそ侍らめ

と見え、名歌であることが指摘されている。

次の『金葉集』（冬・二七三）の藤原仲実の歌

息長鳥猪名のふし原風さえて昆陽の池水氷しにけり

は『堀河百首』「冬・凍」題（九九九）の歌である。また『新後撰集』（冬・四八三）に入集する藤原頭仲の歌

風さむみ夜や深けぬらんしながとりみなのみなとに千鳥鳴く

なり

も出典は『堀河百首』「冬・千鳥」題（九八六）である。『堀河百首』では万葉語を積極的に撰取して和歌を詠んだことが先行研究によつて指摘されている¹⁾。この二例の「しながとり」も万葉語撰取の例に加えられよう。また、二首は冬題で詠まれ、後拾遺集歌を踏襲しており、特に頭仲の歌は「しながとり」が千鳥とともに詠まれていることから鳥という意識はなく、これも枕詞としての用例と解せよう。

その後の勅撰集においては先掲の通り、『新古今集』に万葉集A歌一首が入集している。続く用例は、『続拾遺集』（羈旅・六七一・「旅の心を」・藤原資季）に

しながとりみなのささやのかり枕短き夜半もふしうかりけりと見える。羈旅歌に排される例は、『堀河百首』（旅・一四六四）に源俊頼が

しなが鳥猪名の端山に旅寝して夜半の日方に目を覚ましつと詠んでおり、両首は万葉集A歌が参考歌として挙げられよう。この場合「しながとり」は枕詞として用いられている。

そして、次に見える勅撰集の用例が小稿で問題とする『新後拾遺集』（冬・四八三）入集歌である。

百首歌よみ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

E 初霜はふりにけらしなしながとりみなの篠原色かはるまで

出典は「俊成五社百首」のうち「住吉社百首歌」の「霜」という詞書を持つ（三五八・新後拾遺集歌と異同ナシ）。

この俊成のE歌だけを見る限り、これまでの勅撰集と同様、「しながとり」は「猪名」にかかる枕詞の用法であるといえる。しかし、俊成には「しながとり」の解釈について「鳥」という範疇を越えて理解をしていた形跡が見られる。そこで、そうした解釈を生み出した背景として歌学歌論書で「しながとり」がどのように理解されてきたかを確認したい。

三 歌学書における「しながとり」

さて、冒頭で触れたように、平安時代には「しながとりぬなの」という歌句にまつわる昔話が語られていたとされる。ここでは、歌学歌論書における「しながとり」に関する注釈を見てみたい。

①『能因歌枕』（『日本歌学大系』第一巻 風間書房）

しながとりぬなとりといふことは、むかししるきしゝをとれりける処にてよみつたへたるべし。

※この『能因歌枕』の「白鹿を獲つた」とする「白鹿」説が後世に大きな影響を与えている。

②『口伝和歌釈抄』（『冷泉家時雨亭叢書』三八 朝日新聞社）

五 しながとり

古今云

しながとりぬなのをゆけばありま山きりたちわたるむこがさきまで

猪名野とは津の国にある野なり。むこがさきも同じ国にあり。

能因歌枕には二の義あり。一には六位の下がさねともいふ。

■二にはそうじてとるをいふといへり。又ある人の説云、行幸に御狩のありけるに、ぬはなくして、白き鹿のありければ、

しながとりとは言ふなり。この心ある歌あり。たづぬべし。又、

能因入道、師頼大納言などは、ぬのしゝをいふといふ義は、

本文ありとの給へり。六帖云、

しながとりぬな山ひゞきゆく水のなをのみよせじかくれつまはも

しながとりぬなのをゆけばありま山雪ふりしきてあけぬこの

よは

※揭示する歌は「古今云」とあり、先述の古今集校本に見える

元永本他の伝本との関係が問題となる。後掲する『綺語抄』

所引の人丸歌や『和歌童蒙抄』でも同じ表現となっている。

先掲のように広瀬本万葉集に拠ればA万葉歌には一本として

見える「猪名乃浦廻榜来者」の訓みの一つであろうか。「武庫」

も摂津国の歌枕。ここに「六位の下衣」説が見え、白鹿説・

猪説を列挙する。

③『綺語抄』（『日本歌学大系』別巻一 風間書房）

しながとりぬなの つのくににあり。之にあまたの説有也。し

らがとりといふべきをかきたがへたるなるべし。人丸歌云、

しながとりぬなのをゆけばありまやまきりたちわたるむこが

さきまで

猿丸歌云

しながとりぬなのをゆけばありまやまゆふぎりたちぬともは
なくして

しながとりぬなやまとみてゆくみづのなのみによせしかくれ
づまはも

しながとりぬなやまとみてゆくみづのなのみによりてこひわ
たるかも

撰津国にぬなのといふの、有也。その、は昔雄略天皇の
りし給ひけるに、ぬのし、はなくて、しろきしかのとあれ
りけるより、ぬなのといふとなん。または、しながどりと
ふとなん。あるとてはかりぎぬのしりをはるものなれば、さ
といはんとて、しながどりとといふべし。頼綱などは、ぬのし、
をしながどりとといふとぞいひける、或僧説云、宗延、これは
むかしみかどのかりせさせ給ひけるに、かのし、を百とりて、
そのなかにぬのし、のなかりけり。百みなどはおくにことば
にしていへるなり。かみよ、りいひつたへたる、とかくいふ
べからずと云々。

今案、此説なほ心えず。百といふ事をぬなかことばにしてな
といふべきやうおもひかけず。又かの、をあまねくしながど
りのとなにあらば、さもやともおもひてん。是はうたのしな
として、神といはんとては、ちはやぶるといひ、山といはん
とて、あしびきといふやうに、ぬなといはんとて、しながど

りとよめるにこそあめれ。白鹿鳥はさもやときこゆるものを。
※坤儀部の「野」に分類される。「しらかとり」の言い間違い
であるとする。宗延の説が示され、百を方言で「しな」とい
うこと、枕詞としての用法を指摘する。

④『俊頼髓』(『冷泉家時雨亭叢書』七九 朝日新聞社)

しなが鳥ぬなのを行けばありまやま夕霧たちぬともはなくし
て

しなが鳥ぬな山とよみゆく水のなのみよせしかくれづまは
も

ぬなのは津の国にある所なり。ぬなのといはむとてしなが鳥
とはつゞくる事を人のたづぬる事にてたしかなる事も聞こえ
ず。昔雄略天皇の野にてかりし給ひけるに、白きかのし、の限
りありて、ぬのし、はなかりければ、いひそめたるなり。しな
が鳥といへるは、白きかのし、のかぎりさ、れたれば、ぬなの
とはぬのし、のなかりければいふなりとぞ申しつたへたる。

あるにかりぎぬの尻のながければ、つちにかりぎぬのしりを
つけとてとればしかなりとは申す人もあり。それは見ぐるし。
いづれの野山にかはあるにかりぎぬのしりのつかざらむ。

※猪名野を導き出す詞というが、根拠が不明とする。雄略天皇の
逸話を示し、白鹿をみな獲り猪はいなかつたとする。また、射
るときに狩衣の裾を土につけないように取ることをいうとする
説を紹介しそれを否定する。

⑤『和歌童蒙抄』（『日本歌学大系』別巻二 風間書房）

しら鹿とりぬなのをゆけば有馬山霧たちこむるむこがさき哉
 古来難儀也。さまざまの義の中に、しらかとりといへるは、も
 し日本紀景行天皇四十年云、日本武尊進入信濃。是国也山高谷
 幽、翠嶺万里、人倚杖而難昇、馬頓轡而不進。然日本武尊遙速
 干峯。飢之食於山中。山神令苦王、化白鹿立於王前矣。以一箇
 蒜彈白鹿。則中眼而殺之。爰王忽失道不知所出。時白狗來導王。
 仍得出美濃。先是度信濃坂者多得神氣以瘳臥。但從殺白鹿之後
 踰是山者、嚼蒜塗人及牛馬、自不中神氣也。然者津国有馬山雖
 非信濃坂、霧立渡失路心にて、白鹿とりたりけむ時こえたりと
 読るにやとぞ心得られたる。

※A歌の初句を「しらかとり」としている。日本紀の日本武尊神
 話がここに至って記される。これについては後述する。

⑥『奥義抄』（『日本歌学大系』第一巻 風間書房）

十八 しながとりぬなのをゆけばありまやまゆふぎりたちぬと
 もはなくして

是はよのふる事也。雄略天皇かの野にてかりし給ひしに、しろ
 きかのしゝをひとつとりて、ぬのしゝなどはなかりければ、か
 のしゝをしながどりぬなのと云ふ。白鹿をとりて猪はなきのと
 云ふ也。

※雄略天皇の逸話を示すが、内容は鹿を一匹獲り、猪はいなかつ
 たとする。

⑦『袖中抄』（『日本歌学大系』別巻二 風間書房、橋本不美男・

後藤祥子氏『袖中抄の校本と研究』笠間書院 一九八五参照）

一、しながとりぬなの

しながとりぬなのをゆけばありま山夕ぎりたちぬともはな
 くして

顯昭云、此しながとりをば、万葉或は書志長鳥、或は書四
 長鳥。ぬなをば居名と書きたれば白鹿をとると云がたし。

又かりぎぬの尻をとる共云がたし。ぬなのとは居名野と書き
 たれば、猪無野とも云がたし。又しなが鳥ぬなのとばかりあ
 らばこそ白鹿をとりて猪無野とも云べき。しなが鳥ぬなのう
 らわとも、しなが鳥ぬなのみなどともつゞけたれば野にか
 ざりて云べからず。

今案に、しなが鳥ぬなのと云所の名有べし。いかなればさは
 つゞくるぞと云ば次の事也。それはふるくかやうにつゞくる
 所の中に、心得られたるもあり、又心得られぬもあれば、あ
 やしむべからず。かくらくのはつせともつゞけ、まきもくの
 ひばらとつゞくるやうのところはさてもにこそ侍れ。万葉長
 歌云、

水長鳥 安房に継たる あづさゆみ す糸の珠名は云々

みながとりあはともつゞきたるは所のな也。しながどりぬな
 のとつゞくべき所なれば、わりなく其故を釈すべからざる歟。

又私考云、雄略天皇狩葛城山頂猪暴出。天皇拳脚踏殺云々。
 是故、居名野に狩し給よしをも申歟。

無名抄云、ぬなのは摂津国に有所也。ぬなのといはんとてしながどりととはつゞくる事を人のたづぬる事にて慥かなる事もきこえず。昔雄略天皇其狩し給けるに白きかのしゝのなかりければ云そめたる也。しながどりといへるは、しるきかのしゝのかぎりとられたればいひ、ぬなのとはぬのしゝのなかりければ云也とぞ申伝たる。あるにかりぎぬの尻のながければ土に狩衣の尻をつけじとてとればしながどりととは申人もあり。それはみぐるし。いづれの野山にかは人のぬんにかりぎぬの尻のつちつかずあらん。

私云、しなが鳥の事、前に申つる白鹿取猪無野と書たらばさもいひてん。それすら万葉は文字をかへてとかく書たるふみなれば信じがたかるべし。又しなが鳥を狩衣のしりをとると云はしりなが鳥といふべき力。あうにはかりぎぬの尻をとれば、ぬなのといはんれうにしながどりととはつゞくと云たるを、この野にぬんずる様に難ぜられたる如何。いかさまにも此義ども心得ず。此両義共に能因歌枕にもあげたれど、古ごとはかへりて心えぬ事多し。

興義抄云、これ世のふる事也。雄略天皇の(かの)野にて狩し給しに白きかのしゝをとりてぬのしゝなどはなかりければ、彼野をしなが鳥ぬなのと云。白鹿を取り猪は無野と云也。私云、俊頼は白きかの鹿のかぎりを取と云、清輔は白きかのしゝを一取と云り。其数一六力。

綺語抄云、しらが鳥と云べきをかきたがへたるなるべし。今

云、万葉あまたの歌みなしなが鳥と云り。万葉に鳥と云文字を書きたればしりなが鳥と云は鳥のしりは尾なり。をなが鳥のある野と云カとも云つべし。

又綺語抄云、頼綱朝臣はぬのしゝをしながどりと云とぞ。私云、あしびきの山とつゞくる様にしながどりとつゞくとは云にや。大に心得ず。宗延云、昔御門の狩りし給けるに鹿のしゝを百とりて其中に猪のなかりければ云。百と云事はおくの詞にしなといへる也。神代より云つたへたり云々。私云、百をしなと云事未聞、可考之。しらが鳥には尚おとる義也。しらが鳥は、らとなと同響なればさもいひなしてん。童蒙抄云、

しらがとりぬな野をゆけばありま山霧たちこむるむこがさきかな

古来難義也。さまざまの義の中に、しらが鳥と云るは、若日本紀景行天皇卅年日本武尊進入信濃。是国也山高谷幽、翠嶺万里、人倚杖而難昇。馬頓轡而不進。然日本武尊遙速于峯飢之。食於山中。山神令苦王花化白鹿立於王前。王異以一箇蒜彈白鹿。則中眼而殺之。爰王忽失道、不知所出。時白狗自来導王。(之状随狗而行)仍得出美濃。(吉備武彦自越出而遇之。)先是度信濃坂者多得神氣。以病み臥。但從殺白鹿之後、踰此山者、嚼蒜塗人及牛馬目中神氣也。然者摂津国有馬山者、雖非信濃坂霧立渡天失路心にて白鹿とりたりけん時に似たるとよめるにやとぞ心得られたる。私云、しなが鳥と書てこ

そしらがとり共釈すべけれ。歌にしらがどりと書きたる、相違万葉説力。又下句も相違也。又日本紀は信乃坂也。只夕霧立と云言と白鹿の事許にて釈したる、全不可叶今歌歟。

※諸註釈を網羅的に示し、考察する中に、袖中抄において「しながとり」について言及が見られる。これは地名であつて、「しながとりみなの」と続くべきところなので、必ずしも由緒があるわけでもなく、無理にその理由を解することはない、とする（傍線は稿者に拠る）。

⑧『和歌色葉』中（黒田彰子氏『校本和歌色葉』一粒書房

二〇一六年）

五十一 しながとりみなのをゆけばありまやまゆふぎりたちぬ
ともはなくして

雄略天皇、昔撰津国の野にいで、かりし給に、しろきかのし、をひとつ取りて、あやしゝのなかりければ、かの野をしながとりみなのといふ也。白鹿をとりて、猪はなきこゝろなり。

※奥義抄の説と同様である。

⑨『八雲御抄』第三卷（『日本歌学大系』別巻二 風間書房）

獣

猪

しながとり 白猪云、能因説。俊頼云、雄略天皇あな野にてかりし給ひけるに、白きしゝのみ有て、猪のなかりければ、

しなが鳥あな野とはいへり。かりぎぬのしりと云事は、俊頼も不用。（伏見宮本・凡沙汰外事也 景行天皇 御宇日本武尊於信乃国所見白猪などいふにもあれど其も異説也）凡如此事説々多。皆不可決定。（以下、伏見宮本にナシ）
ふすぬ かるもをかきてぬる也。

※「獣部」に分類し、猪と解している。

⑩『色葉和難抄』（『日本歌学大系』別巻二 風間書房）

一、しながとり

万 しなが鳥あな野を行けば有間山夕霧たちぬやどはなくして

奥義抄云、雄略天皇彼野にて狩し給ひしに、白鹿をひとりて猪はなかりしかば、しらがとりあなのと彼野を云なり。

しらがとりといふべきをしながどりとといひなしたるなり。頭昭云、所の名ふるくよりいひつゝくることおほし。不必修、かくらくのはつせ、こもりくのはつせといもいふがご

とき、大方無由緒こと也。童蒙抄、綺語抄同。しらがどりと云ふべしなどは書誤也。白鹿をとりし故也云々。和云、しながどりとあな野といはんれうに云也。下がさねのしりのながきをあむとはとるが故に、しながどりと云也と云ふ義、

是有り。

※「しらがとり」といふべきところを「しながとり」といったとする。

この平安末期までにおける「しながどり」の変遷について、太田克也氏¹³⁾が的確に要点を次の13項目にまとめている。

太田氏の分類

- (1) 白鹿を獲った。
 - (2) 猪がおらず白鹿を獲った。
 - (3) 鹿を百匹獲った中に猪がなかった(宗延説)。
 - (4) 白鹿はある限り獲り猪はいなかった。
 - (5) 白鹿を一匹獲り猪はいなかった。
 - (6) 全て(の獲物)を獲る。
 - (7) 猪を指す。
 - (8) 六位の下衣(下襲)。
 - (9) 「しらかとり」の書き間違い。
 - (10) 射る際に狩衣の尻(裾)を取ることを。
 - (11) 「しながどり」が「ぬなの」の枕詞。
 - (12) 「しながどりぬなの」という名の場所。
 - (13) 「しながどり」と表記して「しらかとり」の意。
- 太田氏は童蒙抄を取り上げてはいないが、童蒙抄では引用する歌が「しながとり」ではなく「しらかとり」とあり、この分類に随えば(9)ということになる。また(8)の六位の下襲は『口伝和歌釈抄』のみを分類されている。『口伝和歌釈抄』では『能因歌枕』の説を二義のうちの一つとしている。その他の歌学書の中で「衣」に関する説は(10)狩衣の裾を取ること、がある。これは『和名類聚抄』に「裾 和名 ころものすそ 一にいふき

ぬのしり」とあることから、『能因歌枕』の説の解釈が次第に揺れていったと推測されよう。

ここに見られる「白鹿」の話題は先掲の『歌ことば歌枕大辞典』にも次のようにまとめられている。

雄略天皇の時代、天皇が野で狩をした時、白い鹿のししばかりで猪のししがいなかったため、その野を「猪無野」といいはじめたのである。「しなかとり」とは、白い鹿のししばかりを射殺したので「白な鹿獲り(しなかとり)」ということであると。

つまり、「しなかとり」は白い鹿を獲るの意という解釈もなされていた。では小稿で問題とするE歌、俊成における「しながとり」の歌を見てみたい。

四 俊成と「しながとり」

俊成は「しながとり」をどのように考えていたか。建久九年(一一九八)ごろ成立の『慈鎮和尚自歌合』¹⁴⁾九番「冬の歌中に」とある右歌(一一一番歌)に「しながとり」が詠まれており、俊成の判が見られる。歌と判詞を示そう。

左勝

初瀬山しもにこたふる夜半の鐘をもろくも誘ふ風の音かな

同右

しながとりぬなの旅寝の篠枕霰にたどる夢路なりけり

ぬなのたびねのささ枕、いみじくをかしく侍るを、な

ほ泊瀬山のよはのかねをもろくさそふらん風の音、所
 さまも立ちまさりてや侍らん

ここでは「しながとり」についての指摘はないが、「ぬなの旅
 寝の篠枕」という表現を「いみじくをかし」としている。これは
 古歌とりわけ万葉歌を想起させつつも、「猪名」「旅」「篠枕」と
 縁語による表現を評価しているものと思われる。また、羈旅の要
 素を持ちつつ「冬」の歌として詠まれている点も注意される。

ここで、俊成の歌について考察し、俊成が「しながとり」に
 いてどのように考えていたかを見てみよう。

先掲の『新後拾遺集』に入集するE俊成歌（冬・四八三）は『俊
 成五社百首』（文治六年（一一九〇））での詠であり、同じ『五社
 百首』『住吉社百首』の「夏」で「しながとり」を詠んでいる。

照射

ともしにもしながとりとやますらをが猪名のは山を分けし
 のぶらん

これまで「冬」（あるいは羈旅）の歌材で詠まれてきた「しな
 がとり」を俊成は「照射」題で「夏」の歌材として詠んでいる。
 ここでは、「猪名」と詠み込んではいないものの、これまで見てき
 たような枕詞としての用い方ではない点が注意される。これは俊
 成が「しながとり」を「鹿」に関わる歌語であることを意識して
 いたためであろう。すなわち先に示した歌学書にみえる雄略天皇
 の逸話を意識していたと読み取ることができよう。このことから
 少なくとも俊成は「しながとり」を「白鹿獲り」、つまり「白鹿」

に関わる歌語と捉えていたことになる。ここで改めて、問題とし
 ているE『新後拾遺集』入集歌を見てみよう。

初霜は降りにけらしなしながとり猪名の篠原色かはるまで
 冬・霜題で詠まれた該歌は、猪名の笹原の緑色が消え、白く変
 わるほど霜が降りている様子が想起される。ここでは白のイメー
 ジとして「しながとり」が詠まれているものと思われる。

繰り返しになるが、俊成は五社百首において「しながとり」を
 「白鹿」と捉え、「鹿」と解釈したことを夏歌の「照射」によつて
 表現し、「白」という点を冬歌の「霜」に詠むことで表現したの
 である。歌語が持つ解釈の可能性を様々に試みて詠じていると考
 えられよう。

五 中世の万葉注釈書における「しながとり」

さて、「しながとり」はその後、仙覚の『万葉集注釈』¹⁶で次の
 ように加注される。

仙覚 万葉集注釈 卷五

志長鳥居名野平来者有間山夕霧立宿者無為

シナカトリ、キナノトイヘルコト、先達ノ尺サマク也。
 或人云、シロキカノシ、ヲトリテ、猪ノナカリケレハ、シナ
 カトリキナノトイフ。或人云、カリキヌハ、シリノナカキヲ、
 キル時ニハトリテキレハ、シナカトリキナノトイフトイヘリ。
 コノ両義、共ニ由縁アラハレス。コレハ、ムカシ信濃国ヨリ、
 美濃ヘイツル山路ニ、旅人トヲリケレハ、ニハカニ霧フリテ、

ミチヲウシナヒテ人ヲホクシスルコトアリケリ。イカナルユヘトイフコトヲシラス。シカルニ日本武尊陸奥ノ梟徒ヲハシメトシテ、東国ノアシキ輩ヲ、皆悉クウチシタカヘテ、信濃ヨリ美乃ヘイテタマハントスル山中ニシテ、ミヲシタテマツリタリケルニ、御前ニ鹿ノ大王ノシロキシ、マイリテ、尊ノ御マヘニムカヒヨル。ミコト御膳ニソナヘタリケル、赫ヲミテニトリヒシカセタマヒテ、ソノヒルノアハヲ、鹿ニハシキカケタマヒケレハ、ヒルノアハ、白鹿ノ目中ニ入テ、鹿ニハカニシニケリ。サテキリモハレニケレハ、ヘチノ難ナクシテ山ヲイテ給ヒニケリ。ソレヨリノチ、カノ山路難ナクシツマリニケリトイヘリ。シカレハ、シラカトリトイフヘシト、範兼卿ハ尺シテ侍リ。歌ヲモ、シラカトリト書リ。シカレトモ、ムカシヨリイヒツタヘタルカコトク、シナカトリトイフヘシ。ラト、ナト、同韻也。心カハルヘカラサルウヘニ、此集ニハ、今ノ歌ノコトク、志長鳥トモカキ、或ハ四長鳥ナトカケリ。シナカトリトイフヘシトミエタリ。シロキウマヲ、シナコマトイヘルカ如シ。古歌ニ云、キミトワレエモオキヤラスシナコマヤソノアシウラノツチナケレトモトイヘリ。コレハ、人ヲ、コサジトオモフ時ニ、東方ヘユキタル白馬ノ、アシノウラノツチヲ取テ、家ナ、イヘノ、竈ノヘスヒヲ取テ、合葉シテ、ネタル人ノヘソノウヘニツケツレハ、オキアカラストイフ事ノアルヲヨメル歌也。サテシナカトリ、キナトツ、クルコトハ、シナカトリトハマスラヲイヘハ、マスラヲハ、

伴類ヲホクヒキツレタル物ナレハ、キナトツ、クル也。キナトハ、ナハ、男ヲイフ。キトハ、卒トイフ心ナレハ、キナトイハンタメノ諷詞ニ、シナカトリトハヲケル也。大方此集ノコ、口、獵者ヲハ、シナカトリト云。漁者ヲハ、イサナトリトヨメル也。

仙覚は「しながとり」が「しらかとり」と訓まれていることについて、その音韻に注目し、「な」と「ら」は同韻であるがゆえであり、万葉集の表記は「志長鳥」と「長」であるから、「しながとり」なのであって、「しらかとり」という訓みは採らないとする。また新たな指摘として「しながとり」を「獵者」とし、「漁者」を「いさなとり」と万葉集では詠んでいる、とする。

では、南北朝期の由阿による万葉集注釈書『詞林采葉抄』¹⁷⁾を見てもみよう。

志長鳥伊那（付水長鳥／安房就）

当集第七卷歌

ナシニシテ

シナカトリキナ野ヲユケハアリマ山夕霧タチヌ宿ハナクシテ

シナカリ説々不同也。或云狩衣ノ裾の長ヲ居ル時カヒトリテ居ヲ云也。或云、摂津国猪名野ニテ狩ヲシケルニ白鹿ヲ取テ猪ハナシト云ケルヨリ申ト。爰日本紀景行天皇四十年日本武尊進人信乃是山也。山高谷幽翠嶺万重人倚杖而難昇山險磴紆長峯数千馬頓轡而不進日本武尊披煙陵霧經大山遙速千峯飢之

食於山中、山神令苦王以化白鹿立猶王（ママ）前異之以一箇蒜彈白鹿。則中服而殺之。爰王忽失道不知所出時、白狗來道皇。随狗往仍得出美濃。吉備武彦自越出而遇之。先是度信乃坂者多得神氣以痛臥。但從煞白鹿之後躑是山者嚼蒜塗人及馬牛自不中神氣也焉。

今考之、彼信乃国伊那郡白鹿取玉フコトヲシナカトリキナト云ツ、ケルヲ今ノ世ニハ撰津ノキナノニトリヨセラル諷詞トスルニコソ。例セハ同国若栗林ト云所ヲ過玉フニ夷族襲タテマツラントス。尊則白鳥トナツテ南山ニトヒノホリ玉フ。其所ヲハ白鳥トテ今世ノ駅館也。鳥羽山トテ有之然而近代ハ城南ノ鳥羽ヲ白鳥ノ鳥羽ト云ナラハセルカ如シ。白ヲシナト云詞当集第二卷云

ミクサカルシナノ、真弓ワカヒカハムマサヒテイナト
イハムカモ

三草トハス、キ也。シナノトハ薄ノ白クカレタル野ヲ云也。
白キ野ヲ信乃ニ言フカル也。古哥云

君ト我エモヲキヤラスシナコマヤソノ足ウラノ土ナケレ
トモ

シナコマトハ白駒也。哥ハ人ノネタルヲコサシト思ニハ東方へ行葦毛ノ駒ノ足ノウラノ土ヲ取テ七家ノ籠ノヘスヒヲ取合葉ニシテネタル人ノホソノ上ニ付ツレハオキアカラスト云コトヲヨメルナリ。又薄ヲ三草ト云事日本紀第一曰使山雷者採五百箇真榊八十五箇使野槌者採五百箇野簾八十五箇矣。此

天照太神ノ石戸ニ籠セ玉シ時ヲコリ出シタテマツラムトセシ態也。依之信乃国諏方ニ御射山ノ祭ニハ薄ヲトリテ御幣トスル也。仍三草カル信乃ト云ナリ。又信濃ノ真弓ト云事、続日本紀云大寶二年甲午信乃国梓弓一千張以死大宰府ニ矣、梓弓ハ弓ノ本タル故ニ真弓ト云也。信乃国ノ古濟也焉。次水長鳥安房ニ就タル云事、続日本紀曰日本根高瑞淨足姬天皇御宇養老二年五月甲午朔乙未割上総国平郡安房朝夷長狭四郡ヲ置安房国矣。然而長狭等四郡ヲ取テ安房ニ付ト云詞歟云々。随而当集第九卷詠上総ノ末珠名姫子哥ニ

シナカトリアハニツキタル梓弓スエノ玉ナハムナ分ノ
ヒロキワキモ腰細ノスルカヲトメカソノカホノウツクシ
ケサニ花ノコトエミテタテレハ云々

右哥ノアハニツキタル梓弓トハ安房ニツキタル上総弓ト云詞也。弓ハ彼国ノ貢調也。又シナカトリアハニツキタルトハ倭武尊ノ蒜ノ泡ニテ白鹿ヲ取玉事ヲ申トモ云。誠ニ言ノ縁サモト聞ユ。然而此哥ハ四郡ヲ取安房付ト云歟。凡当集庭訓ニ仙覚註置之處ハシナカトリハ獵者也。イサナトルトハ漁父也ト云。此上之末字蒙昧之微質雖非可及了簡令披見一部始終有契此理ニ之歌有違此詞之所於如然ラハ不可有每首一致之儀者哉。所詮シナカトリハ白鹿ヲ取伊那ト可心得者歟。伊那トハ信乃ト美濃トノ境ナル伊那郡ナルヘシ。是則日本武尊美乃へ出玉ト云詞に符合セリ。爰ニ仙覚庭訓ノシカナトリキナトハ獵士ハ類多キ者ナレハサソヒキツル、心ナルヘシト云々。日

本紀ノ心ニ令相違歟。又イサナトリ淡海モ只魚ヲ取海トツ、
 クル也ト心得ナハ何ノ歌モ不可有相違者歟。但不窺膏齒之撰
 處ヲ後哲宜令商量之矣。復次水長鳥ノ水ノ字ヲシトツカフコ
 ト当集第十卷哥云水良玉イホツツトヒト書リ。玉扁ニ曰水ハ戸
 祭ノ流津ノ焉。シナカトリトヨメル哥近來ハ少シ
 拾 シナカトリキナノ柴原トヒワタル鳴ノ羽ヲトノオモシロ

キカナ

シナカトリキナノサ、ヤノカリ枕ミシカキヨハモフシウ
 カリケリ（大納言ノ資季）

由阿はまず童蒙抄以降に見られる日本武尊の逸話を引用する。
 これは『日本書紀』巻第七・景行天皇四十年の東征した折のかの
 「新治の」の連歌に続く記事として見える。日本武尊が東征の後、
 信濃国に向かう。その折に、日本武尊を懲らしめようとした山の
 神が「白鹿（しろきか）」となって眼前に現れるが、蒜の異臭によつ
 て邪気が払われ、鹿は殺された、というもの。その場所が信濃国
 の伊那であったという。先に見た仙覚が指摘する「しら」と「し
 な」の同韻を、由阿は「白き鹿を獲る野」であるから「しろきの
 （白き野）」であり、これが「しなの」と言い換えられたとする。
 つまり「しながとり」は「白鹿獲り（しなかとり）」であるとし
 ている。

その上で、仙覚の説を受けながらも、その「獵師」を「しなが
 とり」、「漁師」を「いさなとり」とする説を、これがその日本武

尊の逸話で由阿が積極的に支持する白鹿を獲ることに相違すると
 して否定する。『詞林采葉抄』は周知の通り、貞治五年（一三六六）
 成立で、これは由阿が二条良基の懇願により、万葉歌の講義を行つ
 た際の上覧されたものである。小川靖彦氏は「由阿の学統が仙覚
 の萬葉学の嫡流であることを強く打ち出そう」とした形跡を指摘
 した上で、次のように論じている。

由阿の良基への『萬葉集』講義は、関東の仙覚の萬葉学を都
 の歌壇に伝える重要な役割を果たした。そして（中略）由阿
 の学統（「仙覚・由阿」の萬葉学）は急速な広がりを見せる。
 しかしそれは同時に、仙覚の萬葉学を大きく変容させること
 でもあったのである。¹⁸⁾

この「しながとり」の注釈にも、仙覚の注を踏まえその説を尊重
 しつつ、しかし、謙虚に独自の見解を堅持しようとする由阿の姿
 勢が見られる。

さて、その後、こうした解釈は『六花集注（蓬左文庫本）』に
 も見られる。『六花集注』は「収録する万葉集歌については仙覚
 の『万葉集注釈』、由阿の『詞林采葉抄』『青葉丹花抄』から多く
 を採用している²⁰⁾とされる。万葉集A歌の加注を見てみよう。

一 志長鳥伊那野ヲ行ハ有間山夕霧立又宿ナシニシテ
 志長鳥ノ事色々ノ説アレトモ日本記ノ如ハ日本武尊陸奥ノ幾
 タキラケテ上セ給フ時、信濃国伊那ノ郡ニテ白キ大鹿大君ヲ
 ナヤマシ奉ルトテ御前ニ立リ昼ノ御膳ニ備ヘタル蒜ヲ引切
 テ、其汁ヲ目ニハシキ入賜ウ。鹿王忽ニ死ス。仍白キ鹿トル

猪名ノ郡ト云。ソレヲ今ノ世ニハ摂州ノ猪名野ト引寄テ志長鳥猪名ト申也。此猪名ノ仮名仕今ノ世ニハ奥ノキヲ書ク故ニ猪ノ鹿ヲト意得タリ。

概ね『詞林采葉抄』の説を採っているが、由阿が信濃の伊那であった出来事を「今ノ世ニハ摂津ノキナノニトリヨセラル」とあるところを、ここでは「猪名」の仮名遣いから「猪の鹿」の意とする。由阿の説が曲解されている。²¹その点、次に挙げる今川了俊の『了俊日記』（歌の言の事²²）には、短いながらも

（前略）しながとりみな野 白鹿のみありて猪なかりし故に詠、しなかは白鹿也（以下略）

とあり、「しなか」を「白鹿」と捉え、由阿の説が継承されている。

六 新後拾遺和歌集・冬歌の配列構成

さて、小稿で問題としているE俊成歌は『新後拾遺集』冬歌の霜歌群一連の冒頭歌となっている。ここで、『新後拾遺集』の冬歌の排列構成を考えながら、俊成歌の意義について考えてみたい。『新後拾遺集』の冬歌を考えるうえで、十三代集の冬部の歌材について一覽表に示した。²³

『新勅撰集』以外はすべて「初冬」「立冬」によって始まり、「歳暮」で終わる。十三代集にわたって落葉と紅葉が区別されるかどうかについては従来問題になっているが、『新後拾遺集』では全てが落葉となっており、その他の歌集でも便宜上、落葉と分類した。これは今後継続して考察していきたい。冬部の歌題としては、

『玉葉集』と『風雅集』に「冬鐘」を詠み込んだ歌が排されている点が目新しく注目される。

では、『新後拾遺集』の冬歌について考えてみたい。まず、その出典について検討する。出典が分かるものうち、四首以上が採歌されたものを挙げると次のようになる。

永徳百首Ⅱ一首、延文百首Ⅱ七首、貞和百首Ⅱ六首、
嘉元百首・文保百首・弘長百首Ⅱ四首

『新後拾遺集』の撰集資料である永徳百首からの入集が最も多く、ついで先の撰集資料である延文・貞和の応製百首が続いている。このことから当代を意識した構成であることが理解される。その他、弘安百首と俊成五社百首から三首、堀河百首・千五百番歌合から二首となっている。このようにみえてくると、この俊成五社百首から三首入集というのは注目されよう。冬歌だけではなく、『新後拾遺集』全体にわたって検討するべきであることであるが、これについては別稿で論じたい。

次に、冬歌全一一八首・九四人（うち二首が読人知らず歌）の歌人構成を検討する。巻頭歌を宗尊親王、巻軸歌を尊円親王とする。俊頼、仲実が最古歌人であり、鎌倉期以降当代を中心としたものとなっている。冬歌に二首以上が採歌されている歌人を挙げると次のようになる。

義詮Ⅱ四首、尊氏・為定・俊成・為子Ⅱ三首、
後円融天皇・義満・良基・尊円・尊道・定家・為世・为重・
行家・国助Ⅱ二首

将軍三代を計九首入集させるなど時勢を考えたものといえよう。とはいえ、義詮の歌四首はすべて延文百首からの採歌であり、撰集資料との関係も考慮するべきであろう。

さらに『新後拾遺集』の冬歌全体の排列を考えるべきであるが、ここではE俊成歌で「しながとり」が冬の歌語「霜」とともに詠まれることから、冬部の「霜」詠について十三代集を俯瞰した上で、『新後拾遺集』の「霜」歌群を考察する。²⁴

『新勅撰集』には落葉に続く三首と霜枯れ一首が見られる。²⁵
三七四番歌では「霜置かぬ」と常緑である松に、人目は枯れたが変わらず訪れる風を詠む。三七五番歌の藤原家隆の歌は、家持の「鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」の歌を本歌とし、冬山を際立たせる「夕霜」の「白さ」を詠んだもの。三七六番歌では須磨の浦に冴えた月の輝きを増す「霜夜」が詠まれている。霜歌群とされるものその詠まれ方は月光や寒さといったものを際立たせるために添えた歌材となっている点に注意される。

『統後撰集』では時雨歌群の後に六首が見られる。四七九番歌は残菊の色を変えるものとして霜が詠まれている。四八〇番歌では朝霜が残る冬山の、厳しい寒さを詠んだ歌が続き、四八一番歌

では「露の名残」によつて霜枯れている様子を詠んだ歌が並ぶ。四八二番歌は夜ごとに寒さが増してゆく様子を霜によつて表現し、四八三番歌では霜が重ねて置かれることでより一層寒さを感じる歌が排されている。そして四八四番歌では「霜こぼる」様子を知らせる鳴の羽音も寒いのだ、と寒さを強調する歌が並んでいるといえよう。

『統古今集』でも時雨歌群の後にやはり六首が見られる。五八八番歌では「寒草」という歌題の「寒さ」を象徴するものとして霜が詠まれている。五八九番歌では霜が埋む苅田を「踏みしだく」音が表現されており、五九〇・五九一番歌では「霜枯れ」の野辺を詠んだ歌が並び、五九二・五九三番歌は霜が溶けて露になるという自然の変化を詠んだ歌が排されている。

『統拾遺集』では霜が十首、排されている。四〇一番歌では霜によつて朽ちる木の葉を詠じた歌を排し、それまでの「落葉（紅葉）」歌群とを橋渡しする。四〇二・四〇三・四〇四番歌は露が霜となるさまを詠んだものであり、四〇五番歌は冬となり早くも日が暮れて霜が置くことを風も防ぎきれないとその寒さを強調し、四〇六番歌は霜枯れてゆく冬の草、四〇七番歌には夜更けの霜によつて枯れてゆく宿の冬草に人も「離れ」てゆく宿を掛け、四〇八番歌も人の訪れが「離れ」ることにしたがい枯れゆく草に置く霜を詠んだ恋の要素を含む歌を二首排し、四〇九番歌では霜深い庭の寒さを、四一〇番歌では霜枯れの冬景色となった野辺の中に見つけた花を秋の形見と見る歌を排している。

『新後撰集』では「冬枯れ」歌群とした十首の中にも霜が詠み込まれているが、冬枯れの中には霜を詠み込んでいない歌も見られたので、霜歌群としては五首と捉えた。四六七番歌では「霜さゆる」とその冴えた寒さを表現する歌から始まり、四六八・四六九・四七〇番歌では霜によって朽ちてゆく草葉を詠んだ歌、これに続けて朝霜によって蘆が枯れたことにより、舟が湊に入りやすくなったことを詠んだ歌が並んでいる。

『玉葉集』では「冬菊」三首と後の四首に「霜」が見られる。八九五番歌は霜をかき分けて賞翫しなくてはならなくなったことを詠んだ歌から始まる。八九六番歌は霜によって変色する菊を詠み、八九七番歌は他の草は霜によって朽ちたが庭の菊だけは秋の姿を残しているという「菊」と「霜」の歌が並ぶ。八九八番歌は小笹以外はすべて霜枯れの色となったとする歌、八九九番歌は木の葉の散り敷いた上に置いた霜に寂しさを感じる歌、九〇〇番歌は冬が深まり早朝に白い霜が降りているときは常緑である松もかえって寂しいとし、九〇一番歌は寒い早朝に降りた霜を見て我が子を思う歌を排する。霜が冬の寂しさを増長させるものとして表現された構成である。

『続千載集』は歌集全体における冬の割合が十三代集では最も高い。ここでは霜歌群を四首としたが、続く冬月歌群と捉えた中にも霜が詠み込まれており、冴え冴えとした月の様子をさらに強調する役割を霜が担っている。六一三番歌では霜枯れの垣根を目にし遠くなった秋を思い、六一四番歌では霜によって枯れ果て

た籬や野辺を詠み、六一五・六一六番歌には霜枯れによって人目も枯れると詠んだ歌が並んでいる。

『続後拾遺集』では落葉に続く冬菊二首を排した後、寒草歌群の七首の中に「霜」が見える。四三六番歌は霜枯れの音に注目し、四三七・四三八番歌は露が霜となるさまを詠み、四三九番歌でも「霜さやぐ」と音に注目している点の特徴である。その点で考えると四四〇番歌も「夕霜払ふ袖」とあり、霜枯れた冬の野に響く音に注目している。四四一・四四二番歌は「山風」「浜風」と風を詠み込み、その「冴え渡る」様子を表現している。

『風雅集』は一六首と多くの歌で霜歌群が構成されている。七五八番歌の、苔の色が初霜によって白く変化したことから始まる。七五九・七六〇番歌は霜枯れの様子を示し、七六一番歌「霜寒き」、七六二番歌「霜こほる」、七六三番歌「さゆる霜夜」、七六四番歌「置く霜」の冷たさ、七六五番歌「夕霜寒し」、七六六番歌「夕霜こほる」と霜による冷え通る寒さを表している。続く七六七番歌「しろき霜」、七六八番歌「しろたへの霜」とその白さに注目し、月の光が凍るような冷たさであるとする詠が排されている。七六九番歌、七七〇番歌は霜枯れた景色と人事を重ね、七七一番歌は風のために置き所がない霜を詠み、七七二番の家降歌では再び「霜白き」とし、冬山の寂しさを霜によって表現している。七七三番歌では溶けた霜で木の葉がぬれ朽ちた木の葉が赤茶に変色する美しさを表現した歌で締めくくられている。

『新千載集』も一五首としたが、うち一首は霜の語が見えず、

冬枯れとすべきかとも考えるが、やはりその他の詠は霜に焦点が当てられていると捉え考察する。六三三番歌「霜埋落葉」題で木の葉を隠す朝霜から始まり、六三四番歌では秋の露が結んだ初霜、六三五番歌では庭に散った露が寒さによって霜となったとし、六三六番歌は文を書くための露が霜となり、便りが絶えてしまったという歌など露が霜となる歌が三首並ぶ。六三七番歌には霜の歌語は詠み込まれていないが、萎れ果てた草木が詠まれる。再び六三八番歌以降には「霜」が詠み込まれ、「霜枯れはつる」庭の荻原の様子、六三九番歌は小笹に霜が冷たく置かれ、白一色となった野辺の冬草と霜の色に注目し、六四〇番歌は深山おろしが吹き付けた笹の葉に降りた霜、六四一番歌は霜によって青葉がまれになった野辺の下草、六四二番歌は為兼の歌で置き添う霜が消えそうになるとすぐさまに凍ってしまう庭の冬草を詠んだ歌が並ぶ。六四三番歌は踏み枯れている道の辺の草に結ぶ朝霜、六四四番歌は日ごとに寒さが増している様子を霜によって表し、六四五・六四六番歌では残菊に霜が置き、白菊を見る心地を詠んだ歌が並び、六四七番歌では霜枯れた冬野から凍った野原の池水を排し、凍った水がその光を磨くとする冬月へと続いていく。

『新拾遺集』では霜歌群を一〇首とし、五九四番歌の人知れず結ぶ夕霜から始まる。続く二首は延喜十三年の菊合の歌が並び、五九五番歌は冬野の風には散らなかつた菊の花も今日を限りと霜が置くとし、五九六番歌は霜が置きその色の濃淡を見ることができなくなつたと後悔する。五九七番歌も霜による移り変わりを詠

んだ歌。続く六首は寒草と組み合わせられた霜枯れを詠んだものが並ぶ。五九八番歌は風が冴え日が暮れてくればまもなく霜が結ぶであろうとし、五九九番歌は霜が冴えて浦風も寒い「朝ぼらけ」と前歌とは時間的対比がなされている。六〇〇・六〇一番歌は霜に枯れる荻を詠んだ歌が並び、六〇二番歌は緑が少なくなった猪名の篠原を詠んだ歌である。

最後の勅撰集である『新統古今集』では、冬部において月歌群・冬枯れ歌群の中に見られる。それは月光や籬の花と、霜を見紛うという表現となっている。

以上、大変雑駁ながら十三代集の冬部のうち、『新後拾遺集』を除く「霜」の歌を見てきた。霜のきらめきによって凍と冴えた寒さが表現されている。そしてここでは特に、『新勅撰集』三七五番歌及び『風雅集』七七二番歌の家隆の歌で明確に詠まれる霜の白さ、松や篠原といった緑との対比によって「白」という色が強調されている点に注目したい。

さて、ここで本題の『新後拾遺集』の霜歌群五首とこれに続けて「霜」が詠み込まれている寒蘆歌群三首、月歌群冒頭二首を見てみたい。

百首歌よみ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

483 初霜はふりにけらしなながとりみな篠原色かはるまで

堀河院に百首歌たてまつりけるに、霜

俊頼朝臣

484 住吉のちぎのかたそぎゆきもあはで霜置きまよふ冬はきけ

り

- 寒草の心をよめる
祝部成光
- 485 人目さへかれ行く霜の古郷に残るもさびし庭の冬草
文保三年百首歌たてまつりける時 前大納言為定
- 486 枯残る冬野の尾花打ちなびきたが手枕も霜やおくらん
冬の歌の中に 皇太后宮大夫俊成
- 487 難波潟蘆のかれ葉に風さえてみぎはの鶴も霜に鳴くなり
江寒蘆を 権中納言為重
- 488 難波江や蘆のよなよな霜こほり枯葉みだれて浦風ぞ吹く
後西園寺入道前太政大臣家十首歌に 津守国助
- 489 入江なる蘆の霜がれかりにだに難波の冬をとふ人もがな
百首歌たてまつりし時、寒蘆 従三位雅家
- 490 難波潟枯れてもたてる葦の葉のをれふすまでと浦風ぞ吹く
題しらず 源義種
- 491 霜さやぐ夜半も更け行く篠の葉に氷れる月をほらふ山風
平重時朝臣
- 492 霜枯の野中にこぼる忘れ水忍ぶかげなき冬の夜の月
四八三番歌の「しながとり」と四八四番歌「ちぎのかたそぎ」⁽²⁶⁾
はともに歌学書の中で問題視され、縷々論じられてきた歌語である。歌語の中で問題となるものを連続させつつ、「初霜」の白の世界を構築している。その際に四八三番俊成歌で篠原の色が変わると、緑から白への変化を歌語の変遷における説話の世界から「白鹿」ばかりがいる野原を想起させることによって白のイメージを深めている。先に見たように『新拾遺集』六〇二番歌では「緑

少なし猪名の篠原」と詠まれており、もともと緑の篠原が広がる猪名の風景を、俊成歌ではその緑を真っ白に変える効果を「しながとり」の語が果たしているといえよう。さらに、四八五番歌で『古今集』（冬・三一五・源宗子）の「山里は冬ぞさびしさまざりける人目も草も枯れぬと思へば」を本歌として、霜枯れの荒れ果てた冬のふるさとの世界を作り上げている。これは四八六番歌で「尾花」を詠んだ歌が並んでいるように、草木ばかりか人目も枯れていると人事へと目を向けていることが注意される。尾花とすることで恋の要素も含まれよう。これに続けて、霜枯れの難波の蘆と寒々とした浦風を詠んだ歌が並ぶ。そして四九〇番歌では枯れてもなお凛と立つ蘆の葉にさらに強く吹き付ける浦風を詠んだ歌が位置し、四九一番歌では月光が冷たく篠の葉に差し込み、まるで霜が置いたように光る、その霜を払うように山風が吹き、さやさやと音を立てる様子を詠んだ歌が排される。ここに「猪名の篠原」のイメージが背後にあると考えるのは深読みであろうか。四九二番歌は霜枯れて何もない野中にひっそりと凍っている忘れ水に、思い慕う面影も光もない静寂とした冬の夜の月を詠んだ歌が排されている。

『新後拾遺集』冬歌において「霜」は小さな歌群であるが、そこに「しながとり」という歌語を詠んだ俊成の歌を、撰者が遠が歌語史の変遷や当代の万葉集講義の知識などを理解し、これを排したことで、従来詠まれてきた冬の歌語に新たな白の世界を作り上げたといえよう。一つ問題になるのが、これまで見てきた中世

の万葉学の系統である。小川靖彦氏に拠れば仙覚の学統は

仙覚―寂恵―冷泉為相―由阿

とあり、このあとに天台座主や僧都、僧侶らとともに二条良基が位置する。為相の名も見え、冷泉派が強く関わっていると考えられる。小稿でも資料としては由阿のあととは俊という冷泉派の長老の歌学書を挙げるにとどまり、二条家に関する資料は管見に及んでいない。二条家と万葉集の注釈書の関係については、二条為氏の子で為世の同母弟である定為が、『万葉集註釈』（時雨亭文庫蔵）を書写していることが挙げられよう。²⁷この『新後拾遺集』の排列構成を見ると、当時の「しながとり」に関する考えは、二条冷泉という派を越えて理解されていたものと思われる。そこにはやはり二条良基という大きな存在があったことはいうまでもない。

七 おわりに

小川豊生氏は、院政期において歌語に対する「本説」が次々と捏造され、それを許容する荒唐無稽な世界として「日本紀」が機能したと指摘し、歌語「しながとり」もその一例として考証されている。²⁸南北朝期にいたって「白鹿」という解釈が定着し、冬の歌語として「白さ」と「寒さ」を加えて注目されたものと考ええる。

『新後拾遺集』の四季歌は二条為遠の撰によるものであり、そこにもつと為遠の撰歌意識を読み取るべきであろう。為遠は、尊卑分脈に拠れば、父の為定が法体でありながら撰集した『新千載

集』の四季部六巻を持参し奏覧したという。為遠はその頃からすでに勅撰集の編纂を意識し、特に四季部に関しては構想を持っていたと思われる。『新後拾遺集』冬歌全体の排列を記すべきであったが、これについては他日を期すこととする。「しながとり」について網羅的な調査を試みたが、万葉語が南北朝期においてどのように解釈され、歌語として詠まれていたかという点については多くの課題があり、引き続き調査を続けていきたい。

注

- (1) 『古代文学会報』二号 一九六七・五 北大古代文学会
- (2) 『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店・徳原茂美氏執筆）
- (3) 和歌に詠まれる「鳥」については、唐澤正実氏「『八雲御抄』枝葉部「鳥部」管見」（『歌ことばの歴史』笠間書院一九九八）や同氏「順徳院の鳥の歌―山鳥を中心に―」（『和歌文学の伝統』角川書店 一九九七）などがある。
- (4) 『校本万葉集 別冊二』（岩波書店 一九九四）に拠る。なお、その他、『校本万葉集』には初句の訓みについて諸本間における異同はない。諸説として、初句「シナカトリ」は仙覚の注に「シラカトリ」とする範兼の『和歌童蒙抄』の説を否定するとある。
- (5) 新編日本文学全集『万葉集』（小学館）の頭注には「しなが鳥」を「猪名野の井にかかる枕詞。「にほ鳥」ともいい、湖沼にすみ、潜水が巧みな鳥、かいつぶりの古名。雌雄仲睦まじ

い鳥で、常に合い率いるところからキ（率）にかけた」とする。

- (6) 『古今集校本』（新装ワイド版 笠間書院 二〇〇七）。
- (7) 小川靖彦氏「訓み」を踏まえた萬葉集歌の改変」（『萬葉学史の研究』（おうふう 二〇〇七））における『古今和歌集』の萬葉歌の認定に関する一覧表一三四頁参照。
- (8) 『新古今和歌集全注釈 三』角川学芸出版 二〇一一）。
- (9) こうした万葉仮名の誤読の可能性については注7小川靖彦氏（一〇四頁）が指摘しているが、その中に「ミ」と「シ」に関する指摘はない。
- (10) 新編日本古典文学全集に拠る。
- (11) 特に竹下豊氏「堀河百首」の歌ことばと歌史的位置」（『歌ことばの歴史』笠間書院 一九九八）↓堀河院御時百首の研究」（風間書房 二〇〇四）、家永香織氏「堀河百首」における万葉語撰取の様相」（講座 平安文学論究 風間書房 二〇〇三）↓転換期の和歌表現—院政期和歌文学の研究—（青南舎 二〇一一）より多くの学恩を受けた。
- (12) 『口伝和歌釈抄』が引用する古今集の問題については、濱中祐子氏「口伝和歌釈抄」所引の『古今和歌集』（『和漢語文研究』一二号 二〇一四・一一）に論究がある。
- (13) 「藤原教長の初学期の周辺—興福寺歌壇との関わりを中心に—」（『和歌文学研究』一一号 二〇一五・一二）、論を二示す上で分類番号を変更して引用したことをお詫びする。
- (14) 馬淵和夫氏『古写本和名類聚集成』（勉誠出版

二〇〇八）。

- (15) 当該歌合の判詞がその後の新古今歌壇に大きく影響を与えたことは、安井重雄氏『藤原俊成 判詞と歌語の研究』（笠間書院 二〇〇六）に詳しい。
- (16) 『仙覚全集』（『万葉集叢書』第八輯 臨川書店 一九七二）。
- (17) 『冷泉家時雨亭叢書』七八（朝日新聞社 二〇〇五）に拠る。
- (18) 小川靖彦氏注7・五〇三頁参照。
- (19) 古典文庫本に拠る。
- (20) 『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー）尾羽石真理氏執筆。
- (21) その後の正徹の歌には「しながとり」が「居」を導き、「猪」説で詠まれている。正徹の『草根集』の歌を挙げる。
- 3098 臥す^んほども夏の雨夜のしなが鳥いかにさだめてかるもかくら
 4109 み草をばかるもになしてしなが鳥いなさほそ江にやどる月影
 445 しなが鳥ふすさへおなの湊田に又たちあかささをしかの声
 6321 神な月いほふも久ししなが鳥ぬの日の夜はの時しかはらで
 8739 しながどりいその上山杉ふりて寺もかるもの床と成りぬる
 9204 しながどりふしうきおなのみなど舟あまのかるもの浪の枕は
 「しながとり」を「おな」の枕詞としている例は⁴¹⁰⁹番歌があるが、
 「かるもになして」とあり、その他傍線を附したように「臥す」
 「かるもかく」「かるもの床」は猪の縁語である。⁹²⁰⁴番歌も堀河
 百首の頭仲詠を踏まえつつ「あまのかるも」と「刈る藻」に「か
 るも」を掛けて詠み、やはり猪として捉えている。また、⁶³²¹番

歌は「冬祝」題で、亥の月(旧暦十月)の最初の亥の日に行われた「亥子祝」を詠んだものである。古代中国ではこのときに穀類を交ぜた餅(亥の子餅)を食べたとする風習からとも、景行天皇が土蜘蛛を滅ぼした際に地面を打ったことから、害虫を駆除し豊作を願う行事となったともいわれている(『年中行事大辞典』吉川弘文館 二〇〇九など参照)。そのことを詠んだものである。多詠の正徹ならではの工夫が見られる。

(22) 『今川了俊歌学書と研究』(未刊国文学資料刊行会 一九五六)に拠る。

(23) 「霜」を歌材として認定する際に、寒草(冬枯れ)などの歌群と明確に区別することは難しく、例えば和歌文学大系(明治書院)の続後拾遺集(深津睦夫氏校注)や新続古今集(村尾誠一氏校注)の脚注を参考にすると、霜歌群としては見えない。よって、一覧表には歌材として「霜」が詠み込まれているものには()を附した。

(24) 中世における霜については、稲田利徳氏「中世文学における寂寥美―霜置く景色―」(『解釈』二二巻六号 一九七五・六)より学恩を受けた。

(25) 新勅撰集の冬部については、岩崎禮太郎氏「新勅撰和歌集における冬部の構成と特質」(『日本文学研究(梅光女学院大)』一八巻、一九八二・一一)の学恩を受けた。

(26) 「ちぎのかたそぎ」については、家永香織氏「歌語「ちぎのかたそぎ」に関する一考察―長承三年九月十三日中宮亮頭輔

家歌合基俊判をめぐって―」(『国文』七九号 一九九三・七)注11『転換期の和歌表現』に再録)に詳しい。

(27) 冷泉家時雨亭叢書三九『金沢文庫本万葉集卷一八 中世万葉学』(朝日新聞社 一九九四) 竹下豊氏の解題。なお、竹下氏に拠れば、その内容は玄覚の注である可能性が高いとされる。

(28) 『院政期歌学書の言語時空』(『日本文学』三七巻六号 一九八八・六)

なお、和歌は断らない限り『新編国歌大観』から引用し、冷泉亭時雨亭叢書から引用した歌学書類の本文とともに私に表記を改めた。

付記

稿中にも記したが、成稿中に注13太田克也氏の論考に接した。小稿の前半部は太田氏の研究と重なり合うところ、またその見解に随うところが多い。しかし、歌学書の該当箇所の全文を示した点と太田氏が検討から外された和歌童蒙抄に関しても小稿で言及したことなどから、多少なりとも意味があると考え、そのまま論を進めた。太田氏の学恩に改めて感謝申し上げる。

また、校正中に黒田彰子氏より『校本和歌色葉』『口伝和歌釈抄注釈』を賜わった。特に『口伝和歌釈抄注釈一』には巻末考証として濱中祐子氏「『口伝和歌釈抄』における『能因歌枕』があり、「しながとり」について考察されている。小稿では学恩を充

分に活かせなかったことをお詫び申し上げます、ご高配くださった黒田氏に心より御礼申し上げます。

